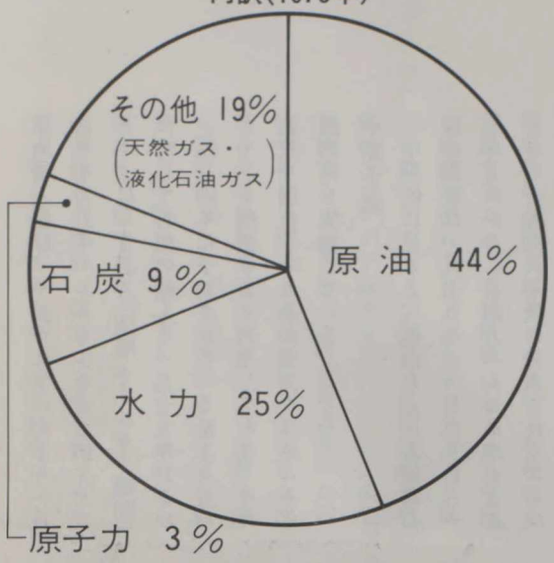
富であるが、州単位で見るとかなりの差がある。たとえば、ケベック、マニトバ、ブリティッシュ・コロンビア、ニューファンドランドの各州は、一九七七年の時点で、必要電力の九〇パーセント以上を水力発電によってまかなっている。反対にプリンス・エドワード島では、水力発電は全く開発されておらず、発電は一〇〇パーセント、石油を燃料とする火力発電である。アルバータとサスカチュワンも水力資源の乏しい州で、両州に豊富な炭化水素燃料（主に石炭と天然ガス）を使って火力発電を行っている。カナダで最大の電力消費地オンタリオ州では、水力三八パーセント、原子力二六パーセント、化石燃料三六パーセントという状況である。

エネルギー消費

一九七八年にカナダで消費された一次エネルギーは、およそ八千六百兆BTUで、原油四四パーセント、水力二五パーセント、石炭九パーセント、原子力三パーセント、その他19%（天然ガス・液化石油ガス）

カナダにおける
エネルギー消費の
内訳（1978年）



ーセント、石炭九パーセント、原子力三パーセント余という割合であった。原油と液化天然ガスの消費量の上昇率は二・四パーセントに抑えられた。これは、一九七三年～七七年の上昇率五・三パーセントより低い。一人当りの電力の消費量は十三・四メガワット時であった。天然ガスの消費量はわずかに増えて、推定一日当り一億千二百十万立方フィートとなった。石炭とコークスの消費量は三千五百万ショート（米）トンで、そのうち七三パーセントは発電に利用され、残りは大半が製鉄高炉用に使われた。

消費の地域別内訳は、オンタリオ州とケベック州が最大の消費地域で、合わせて全体の六二パーセント、次が平原諸州で一九パーセント、ブリティッシュ・コロンビア州と準州一一パーセント、大西洋沿岸諸州八パーセントとなっている。

人口一人当りのエネルギー消費量は、気候や産業構造によって地方間の差が大きい。最大の消費地はアルバータ州で、同州の一人当りエネルギー消費量は最少消費地域の大西洋沿岸地域を七〇パーセント以上も上回っている。

地域によってエネルギー消費量が異なるだけでなく、消費するエネルギーの種類も異なる。たとえばカナダ随一の石油・天然ガス生産州であるアルバータ州では、一次エネルギー総消費量の五〇パーセントが天然ガスである。それに対し、アルバータのガス井から数千キロも離れている大西洋諸州では、天然ガスが市場に現われることは全くない。同地方のエネルギー源は、主に石油であり、エネルギー消費全体の七五パーセント強を石油が占めている。このようにカナダでは、地理的要因と資源状況に応じて、各地方はそれぞれ独自のエネルギー構造を形成してきた。大西洋沿岸諸州や北部のような地域では、主として石油に依存しており、ブリティッシュ・コロンビア、ケベック、マニトバなどの諸州は、水力発電への依存度が高い（これら各州では石油の消費量も大きい）。アルバータ州とサスカチュワン州では、全エネルギー需要の四分の三以上が石油と天然ガスであるが、石炭の消費量も比較的多い。オンタリオ州は、おそらくカナダで最もエネルギー消費の多様化が進んでいる地域で、その内訳は一九七七年現在、石油約四〇パーセント、天然ガス二三パーセント、石炭一五パーセント、水力発電一三パーセント、原子力発電九パーセントとなっている。ちなみに、同州は、原子力発電によって電力を供給している唯一の州である。

エネルギー事情と展望

原油、天然ガス、電力、石炭等、すべてのエネルギー源を合わせると、カナダはエネルギーの純輸出国である。しかし石油については、純輸入国となっている。一九七八年に、カナダは平均一日当り六十万バレルの割合で石油を輸入している。その年におけるカナダの原油および石油製品の対外収支は、およそ十四億ドルの赤字であった。一九九〇年までにエネルギーの自立を達成する――というのがカナダの希望である。

短期的展望

一九七九年第1四半期の国内石油生産量は、日産二十万バレル増えた。前年同期に比べて一四パーセントの増産である。この増加分は、東部カナダのモントリオールに至る地域への追加供給と、米国から東部カナダへ輸出される石油と引き換えに米国西部へ送られる分に回された。その結果、第1四半期におけるカナダの

オイルサンドの採掘